

|||||  
 卷 頭 言  
 |||||

離 合 集 散



野 副 尚 一

昨年6月まで2年間、企画委員長の任を優秀な企画委員の方々の尻馬に乗って、また、有能な事務局員の方々に助けられながら、はたまた、学会活動とはなんぞやの思いを抑え、どうやら無事終えることができた。バブル時代とは様変わりして、赤字を心配しつつの企画ではあったが、表面分析を中心とした年2回の表面科学基礎講座の他に、薄膜基礎講座を新たに立ち上げることができた。幸い好評で、将来の展望を持つことができたのではないと思う。この他セミナー、研究会と盛り沢山の企画を行っているので、現在の事務局のマンパワーおよび企画委員への負荷を考えると、今の体制ではこの辺が限界ではないかとも思える。

企画委員長在任中に頭をよぎったことを述べ、今後の表面科学会の更なる発展に向けた問題提起としたい。

過去30年間の表面科学の進歩は正に目を見張るものがあった。表面科学の草創期には、なんとか表面を原子や分子のレベルで理解したいという、新しい分野特有の熱気があった。昔語りする歳でもないが、外国の文献を頼りに自作した電子分光装置を使って、やっとなのおもいでオージェスペクトルを測定し、あるいは、あり合わせの部品で作ったヘリウム放電管と組み合わせ真空紫外光電子スペクトルを測定し、表面を何とか理解したいものだと思戦苦闘した日々が懐かしく思い出される。いつの時代にも、新しい手法、新しい概念は新しい熱気を生み出し、若者を引きつけてやまない。幸い、表面科学の分野には次々に新しい手法が登場し、今では1個1個の原子や分子を操作することさえ可能になってきた。それにつれて、細分化されてゆく狭い専門に閉じこもる、いわゆる蛸壺化が問題となってきた。離合集散、諸行無常は人の世の常とはいえ、皆が居心地の良い自分の学会ないし研究会を新たに作っていたのでは、分野の衰退を招くのではなからうか？ 一方、これから新しく勃興してくるであろう新分野に参入する若者の熱意をすくい上げるためには、また、とかく硬直化し易い学会の体制を革新し続けるためには、学会内組織のダイナミックな離合集散が必要であろう。二律背反する離合集散を調和させるには、日本表面科学会はどうしても今のサイズの数倍の会員数を擁する学会になる必要がある。大きなメルティングポットに沢山の蛸壺を溶かし込み、組織の外からの刺激をエネルギーとして常時離合集散を繰り返す多くの分科会を持つのが学会活動の一つの理想であろう。

表面に係わる研究者、技術者が結集した学会として日本表面科学会が大きく成長してゆくためには、学会活動の透明性の確保、学会組織の若返り、効率化などは真っ先に検討されてしかるべきものであろう。

(物質工学工業技術研究所)